

社会

空腹の至福

公共放送で土日を除き毎夕「ゆうどき・・・」が組まれている。

いつものように女性アナの早口で甲高い声かんだかが、テレビ画面から飛び出して来る。この時間帯は幸か不幸か、我が家の夕食の時間帯である。この日は、男性アナが他県まで出張して豚骨ラーメンの試食であった。厚切りのチャーシューがのった出来立てのラーメンは美味そうで、思わず画面に引き込まれてしまった。

ところで、この日我が家の夕食も今や国民食と云われるのラーメンだったのである。目の前のラーメンは、豚骨ラーメンにはとても敵いそうにない。家内はバツが悪そうに「うちのもトンコツラーメンだと思って食べましょう」と云うのが精一杯。私の方は無言で心のこもった？ラーメンを食べるのであった。

この「ゆうどき・・・」の番組内容には、決まって美味しそうな料理とレシピが登場する。これを見ている限り、日本は平和で経済的な心配は要らないのだと安心してしまふ。紹介される料理は、多種類の材料を使った高級料理ばかりだからである。ゲストの登壇者はそれを口にし、感嘆詞のありったけを並べる。でも、私は何か変じゃないの？と考え込んでしまふ。

私が生まれて初めてラーメンを口にしたのは、忘れもしない昭和三十年の秋の夜、屋台の提灯の下であった。高校生の冒険ごころも手伝って友人と三人で、鳴戸巻き、しな竹、ほうれんそうの載った得体の知れない支那料理に挑戦したのであった。ところが、その味たるや「世の中にこんな美味しいものがあったのか」と思うほどの驚きであった。三十円は当時の苦学生には安くはなかったが、またいつの日か食べたいとの思いは、支那そばと書かれた提灯を見るたびに募^つったものであった。これがラーメンだったのである。

時は移り、巷^{ちまた}には外食店が軒を並べ、高級料理店が出来、わが国では居ながらにして世界中の美味しいものが食べられるようになった。私のラーメンとの出会いから五十年余り後の変わりようである。わが国は、六十五年間それなりに平和であった。多くの人はこの平和を当然のこととして、もはや何ら疑問を持つことはない。しかし、繁栄の裏には陰もできる。世界中には理由や事情はともかく、現在なお飢えに苦しんでいる人々が四人に一人はいると云われている。ラーメンの原材料はほとんどが輸入である。

「チョウウまい！」は偶然の産物ではないのである。ラーメン職人が大鍋で作ったスープを失敗作などと云って、捨てる姿など見た

くはない。日本人は鼓腹の代償に、貧者への憐憫れんぴんを失なった気がしてならない。せめて、ラーメンを食べる瞬間だけでも、飢餓あえに喘ぐ人々の姿を思い、食事への感謝の心を回復出来ないものかと思ってしまう。

勿体ないような平和の中で、私の感性も鈍化し、感受性が食欲に喰われているという現象の、恥ずかしい反省ばかりが残る。ただ、私が今、今までの食事の中で、一番美味しかったものと尋ねられたら、躊躇なく「初めて食べた時の支那そば！」と応えるだろう。空腹はどんなものでもご馳走にしてしまう。あの屋台のラーメンを自分が最も美味しいものとして持っていることは幸せなことである。

今ごろになって「芋粥」の意味が分かるようになった。世の中で一番美味しいものは空腹時の食べものである。考えるまでもなく満腹時にどんなご馳走を並べられても食欲が湧かないばかりか、箸を付ける気にもなれない。それこそが健康な人間の証なのだ。「ゆうどき・・・」のプロの料理人が選び抜いた材料でつくる芸術品よりも、一日のやるべきことをきちんと果たし、素材とそれを工夫して出来上がった家内の作る夕食が、最も美味しいものと思ふべきなのかも知れない。その証拠に私はメタボに縁が遠いし三食たべられる

ことに満足している。

話は遡るが終戦直後、戦争孤児や浮浪者、傷痍軍人が碗を持ち、門口に立っていた姿はいまや伝説になった。それもそのはず、日本が米国と戦争をしたことを知らない若者が多くなっているということが報じられて私は驚く。我々が子どもの頃に見た手塚治虫氏の漫画本に一粒飲めば一ヶ月何も食べなくても済むという薬の話があった。宇宙船内食の話ではない。それほどに当時は食べることが大変だったのだと思う。時はますます歴史を遠くしているが、しかし、人間の食欲だけは、今も当時も全く変わらずにすべての人が持ち続けている。だが、冷静に考えてみると三、四日は絶食しても健康は害さないが過食はあらゆる病の元凶となる。

時の必然だったとは言え、粗食にも感謝し境遇を恨まず健康で働き、戦後日本の経済発展に寄与したのは、飢餓にも近い生活経験を持った人たちの耐性の賜物かも知れないと考える時がある。

何であってもお腹の空いた時の食べ物美味しい。すると空腹は、満腹を期待できる至福の時なのかも知れないと言ってもよいだろう。つまり、充たされない期待感には既にご馳走なのだ。我々は今、ラーメンの味さえ扒べるありがたい時代に生きているのである。